



なごや「聖歌」だより6月号2013

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



復活祭と日曜日4 陰府くだり

『ギリシア正教東方の智』（久松英二著、講談社）によると、プロテスタントの神学者グスタフ・アウレンが『勝利者キリスト』で再評価した陰府下りの信仰表象は初期ハリストス教時代には東西を問わず支配的な位置を占めており、西方では『使徒信条』に「…十字架につけられて死に、葬られ、陰府に下り、三日目に死者のうちから復活し・・・」と教理化されたにも関わらず廃れてしまったとしています。東方では教理にはされませんでした。復活祭や日曜日の礼拝の中で今に至るまで脈々と祝い続けられています。

復活のとらえ方の違いは十字架のキリスト像の描き方にも表れています。西方ではアダムとエヴァの犯した罪の代償として支払われた犠牲の死に強調点があり、苦悩のキリストが多く描かれました。正教会では十字架のイイススは神の栄光を表すもの、勝利のしるし、生命を施す十字架として歌われ描かれます。また至聖所の宝座の奥に置かれる大十字架や宝座用の福音経の表紙には、片面に十字架のイイススが、裏側には必ず復活の姿が描かれて、十字架と復活が一体であることが宣言されています。受難週の礼拝も聖大金曜日主の十字架上の死と埋葬が記念され、続く聖大土曜日早課のテーマは主の陰府下りです。十字架上の死は復活に至る勝利のしるしととらえられ、死への勝利は主日礼拝、正教会の信仰生活全体の基調となっています。

興味深いことに「門を挙げよ」という23聖詠によるイイススと陰府の間答は、そのまま新聖堂の成聖式で用いられます。聖人の不朽体(遺体の一部)を掲げた主教の行列が聖堂の門の前に到着し、門の外から「門を挙げよ、光栄の王入らんとす」と呼びかけると、中で待つ聖歌隊が「光栄の王は誰ぞ」と答え、前回ご紹介した天使と陰府の会話を交わした後に「万軍の主、彼は光栄の王なり」と告げ、扉が開き一斉に入堂します。未だ再臨の時を待つこの世にあって、主ご自身が臨在し、執行する聖体礼儀を行うべく建てられた新しい聖堂の成聖は、復活の主の

今月の予定

聖歌練習

名古屋 聖体礼儀後、半田 今月はお休み

名古屋指揮当番

2日エレナ廣石 23日ピーメン松島 30日マリア松島

勝利宣言です。

死への勝利のイメージは一般人の埋葬式にも浸透しており、正教会の埋葬式には悲しみの中にも力強さと輝きがあります。埋葬の基調色は白、復活の色です。白い衣をつけ白い棺に眠る死者は、復活の時立ち上がり主とまみえるために足を至聖所に向けて安置され、遺族や友人の手にしたロウソクの光に囲まれて埋葬式が進みます。現在の日本の事情では困難ですが、革命前のロシアでは花をいっぱいに入れた棺の蓋を取り、白い馬車にのせて、まるで嫁入り行列のように墓地まで運んだそうです。この時歌われる「聖なる神(=聖天主)」は聖大土曜日早課、イイススの陰府下りを記念する礼拝で歌われる歌、また聖体礼儀の聖堂の入堂歌(聖入歌)でもあります。死は永い眠りの時、主の再臨を待つ希望の時となったのです。

主の死によって死が滅ぼされ、主の復活によって私たちも復活できる者とされた、その勝利の確信は、毎年受難週から復活祭の礼拝で培われ、小復活祭である主日の祈りの繰り返しの途中で血となり肉となってゆきます。

♪ハリストス死より復活し

死を以て死を滅ぼし

墓にあるものに生命を賜えり♪



2010年1月名古屋神現聖堂成聖式の入堂の瞬間

ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ペレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

6. メロディ

礼拝は「絶えざる祈り」の永遠の動きへの歩みです。だったら、小節線の区切りに支配されず、無限のメロディへと回復するように翻訳しなければなりません。

指揮者は手を振る前に、メロディの性質が、定式なのか、自由なのか、あるいは古典的な正教聖歌の特徴であるメロディ定型の組み合わせ（セントニゼーション）なのかを見極めます。定型の場合はシラビック（一つの音節に一音）、ネウマティック（一つの音節に2-3音）、メリスマティック（一つの音節にたくさんの音を当てはめる）があります。メロディの核と定式を、区分け、フレーズ、縦線、長さ記号、拍子、終止形と関連づけて理解します。歌詞と音楽を力づくで縛り付けて、無理矢理歌うのではなく、「行末まで」フレーズを支え、文脈的なメロディにかかるレガートの

ニュアンスを再発見します。終止形の最後の音を、メロディとことばとテクスチュアに注目して翻訳することについては既に述べました。メロディとことばの内容を解き明かす調性のコンセプトを発展させなければなりません。（ここでいう「調性」とは単なるピッチではなく、メロディラインを発展的に広げる創造的チャレンジです）

訳注：正教会の伝統聖歌はたくさんのメロディ定型の組み合わせで作られています。西洋音楽の規則とは異なる土壌で育てられたメロディで、異なる法則を持ちます。たとえば、皆さんもよくご存じのとおり、歌の最後が主音（と思われる音）で終わらないことも多く、落ち着きの悪さを感じさせますが、逆にそれが永遠の歩みをのイメージを作り出しています。ロシアの古い聖歌では、神とか主などの重要語にはたくさんの音が当てはめられて、高い音で装飾的に歌われ、（メリスマティック）、逆に地獄や死は低い音で歌われ、説明的な部分はシラビックで歌われる傾向があります。

参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 「やってみよう」 八調で歌おう1

正教会の伝統聖歌は「八調」の原則に従って作られています。ビザンティンでは音階にも特徴がありますが、ロシアの場合は、特に各調に用いられるメロディ定型（パターン）に各調の特徴があります。

主日や祭日のトロパリには調ごとに特有のメロディのパターンがあり、組み合わせで替え歌のように歌うことができます。たとえば4調トロパリは「亜使徒聖ニコライのトロパリ」と同じ、8調は「常に福」と同じです。6調は「天の王」と同じで、トロパリとスティヒラ兼用です。

実際やってみると、それほど難しくありません。諸聖神父の主日の晩課と早課で歌われる「諸聖神父のトロパリ」を例に挙げて説明します。諸聖神父のトロパリは8調です。8調のメロディは「常に福」と同じですから「ドレミファ・・・」というAパターンと「ミ・・・レド」というBパターンが交互に繰り返されます。これに従って、テキストを区切り、音の動くところに印をつけてみます。

崇め讃めらるるかな／ハリストス我等の神、
光明として地上に我が諸神° 父を立て／彼等を以て我等衆を眞の教に導きし者や、
至りて慈憐なる主よ／、光栄は爾に帰す。

「常に福」のメロディを心に浮かべながら、日本語のアクセントやイントネーションに合うように歌ってみます。何度も歌ってみて、ことばに合わないところ、歌いにくいところを修正します。実際にお祈りでみんなと歌ってみるとまた修正箇所が出てきます。こうして何年か歌っているうちに、具合のよいところに落ち着いてくるようです。そこに聖神が働くのだらうと思います。

この楽譜の一例は <http://www.orthodox-jp.com/liturgy/music/notes/HolyFathers.Tropari8.pdf>

八調のパターンについての詳細はhttp://www.orthodox-jp.com/liturgy/obihod/obihod_index.html にあります。

ホームページのご案内

- 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

- 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

- 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料